

ボルネオ・ダイヤキズムと山地民の生態

－ マレーとダヤクの対比の中で －

石井 眞 夫

1. はじめに — サラワク・ダヤクとカリマンタン・ダヤク

「ダヤク」の名はボルネオ山地に住む獠猛果敢な首狩族として19世紀から知られていた。邦語文献でも、概説書や専門論文を問わず、ダヤクの名称は20世紀後半まで広く使われてきた。ダヤクの名を有名にしたのは、19世紀半ばから太平洋戦争勃発までおよそ1世紀の間サラワクを支配したブルック王朝時代の民族誌的諸報告である。この中で、海から船でブルック王朝行政機関などに対し武力で脅威をおよぼす「海ダヤク」と、首都クチン市の後背山地に住む、比較的従順とされた「陸ダヤク」が区別され、これら名称も民族誌文献の中で広く使われてきた。

ダヤクの名称は、しかしながら現地サラワクでは20世紀半ばには民族集団名称としてはほとんど使われなくなってきた。海ダヤクについては1920年代あたりから「イバン」という民族名称が次第に使われるようになり¹、陸ダヤクについては1950年代頃から「ビダユ」という名称が使われるようになる。ブルック政府は19世紀末から20世紀初頭にかけてのサラワク成立の過程で、反逆的な山地民を制圧するにあたり、ブルック政府統治に協力的な海ダヤクなどの山地民武力を最大限に活用したが、後にこれら山地民には胡椒栽培などを奨励し、経済的に優遇する政策をとった。イバンというまとまりはこうした植民地化の過程で形成されたものであるが、こうした民族集団形成はその後のマレーシア成立とサラワク州の発展過程でも続いて行く²。イバンに限らず、20世紀以降のサラワクでは、行政上の都合から元来は共通の帰属意識を持たない人々を類似の民俗・慣習や生態的適応様式にもとづき、あたかもまとまりある一つの民族集団であるかのように認識・分類し、そうした行政過程で民族意識が形成されて来た。最新の統計月報でも20以上のプミプトゥラ民族集団名が人口集計の対象になっており³、民族集団名としてサラワクで話題に上る集団名はさらに多い。慣習法など民族文化研究では少なくとも50以上の民族集団名が記述されている⁴。

ダヤクという概念は、今日では上記のように植民地化とそれに続く現代国家成立の過程で形成された“民族集団”名とさしたる区別なく、同様に民族集団名として使用されている。この点は、サラワク現地の記述でも、また多くの民族誌的記述でも同様で、海ダヤクは現在ではイバンという民族名称で“置き換え”られている。しかし、本来はダヤクという概念は現代サラワクで使われる多くの民族名称とは趣を異にした概念である。

言うまでもないことだが、ダヤクないしはダヤクと同語源を持つと考えられる概念が、島嶼部東南アジアで「海の方角」に対する「山の方角」を表す方位概念として使われて来たことは古くから指摘されてきている⁵。この概念は古く祖オーストロネシア語に遡ることが出来るもので、ボルネオでは海の方角「ラウ (*laut*)」に対して山の方角、奥地や内陸部、河川上流域

を指し、さらにロングハウス居住などそこでの生活様式、慣習やその住民を漠然と指していた。

ボルネオ山地住民はこの用語をしばしば自称として使っていたが、漠然と山地民を指した用語であり民族名称ということは出来ない。ボルネオ住民は自分の帰属や自集団のアイデンティティを示す必要がある時は、出身村落の近くを流れる河川名で表していた。ダヤクはサラワクだけでなくボルネオ全域で広く使われていた名称で、当然にも特定の民族集団を表すわけではなかった。元来は民族集団名ではなかったダヤクが、後にサラワク植民地行政が進む中で民族集団名として使われたため、曖昧さを避けるために海ダヤク、陸ダヤクのように限定した形で使われねばならなかった。こうしたことから分かるように、現代サラワクでは当然ダヤクとしてのまとまりがあるわけではなく、マレー系、華人系の人々に対して、剰余の人々を漠然と指す時に使われるか、あるいは特定集団を指す場合は「ダヤク・ビダユ」のように複合形で使われる。

一方、同じボルネオ島にあってもインドネシア領のカリマンタンでは、マレーシア領サラワクとはかなり異なる状況が見られる。ボルネオ島は島とは言え、総面積は日本の2倍に近い広大な島だが、古くからボルネオ全域で、河口ないしは河川流域にある交易都市とその周辺を支配する小王国の住民は、内陸奥地とその住民を指し示す場合にはダヤクという用語を使っていた。

そうした状況が変化するのは太平洋戦争後のインドネシア成立以降、インドネシア政府によって進められたトランスミグラーシ政策によるところが大きい。トランスミグラーシ政策はオランダ植民地時代にすでに始められていたが、大規模に進められたのは1960年代半以降のスハルト政権時代である。事実上の軍政による強権的支配が続いたスハルト時代には、受け入れ地域の実情とは無関係に、過疎地域の開発目的から人口密度が希薄な地域に大量のトランスミグラーシ移民が移住させられ、人口構成に大きな変化をもたらすことになった。カリマンタン諸州には人口密度の高いジャワ島とその周辺からジャワ人、マドゥラ人、バリ人などが移住し、人口密度が低かったカリマンタン諸州では総人口に占める土着山地民ダヤクの比率が低下した。特に平坦な南カリマンタン州では、平地民イスラム王国が支配した歴史的経緯から人口に占めるダヤクの比率が低く、残り3つの東、西、中部カリマンタン州ではダヤクと呼ばれる人々が総人口に占める割合は3分の1程度になっている⁶。また、スハルト政権崩壊後も、特に石油資源が豊富な東カリマンタン州では開発の進展によって多くの国内移民が移住しつつある。こうした中で、内陸山地に住むダヤクの少数民族化が進み、ダヤク全体があたかも民族集団であるかのように、政治的権利の主張と民族文化の保護と継承、すなわち「ダイヤキズム」運動を進めているのが現状である⁷。

ダヤクはカリマンタン諸州の広大な内陸部に分布する人々であり、言語的文化的に大きな違いがあることはいうまでもない。しかしながら、そうした違いにもかかわらず、一つの集団ダヤクを構成し、その民族主義を進めようとするのがインドネシア領カリマンタンのダイヤキズムである。これに対して、すでに述べたように、マレーシア領サラワク州ではダヤク民族主義（ダイヤキズム）と呼べるような山地民による統一した民族主義運動は存在しない。かつてダヤクと呼ばれた人々は、最大多数派のイバンをはじめ、ビダユ、オラン・ウルなどの個別民族集団を形成し、それぞれがサラワク地方政治の中で個別の利害を追求している。そうした民族集団もはたして、多くの研究者がイメージするような民族集団としての内実を持つかどうかは疑わしい（石井：2009）。言うまでもなく、同じボルネオ島で陸続きのインドネシア領とマレー

シア領でこのような大きな違いを生み出したものは、オランダとブルック王朝（イギリス）による植民地行政の違いと、独立後のインドネシア、マレーシアの国家と政策の違いである。しかし、国家と行政、政策の違いを包括的に議論する前に、そもそもボルネオの民族状況がどのようなものだったのか、またその中でダヤク概念がどのように使われ、どのように変化したかを仔細に見ておくことが必要であると思われる。

本稿ではサラワク・ダヤク概念とカリマンタン・ダヤク概念を対比・比較しつつ、ダヤク概念とその背景となるボルネオ諸民族のあり方、さらに近年のダヤク民族主義運動（ダイヤキズム）、特に西カリマンタンの状況について報告、考察することとしたい⁹。

2. ダヤク概念とマレー概念

方位を示す概念として、山の方角を示すダヤクは東南アジア島嶼部の多くの地域で海の方角との対比で使われる。ボルネオ島では「海（*Laut*）」との対比で使われたものだが、単に海の方角を意味するのではなく海岸部、平野部の河川合流点とその流域で営まれる生活様式と住民をも包摂する概念である。ボルネオ島周辺海域は古くから海洋交易が活発で、香料交易をはじめとして東西交易航路の要衝に当たる。その交易権と交易船舶の支配は東南アジア島嶼部諸王権の政治的・経済的基盤だった。

「交易の支配は行政権の一部だった。ジェームズ・ブルックは19世紀の初め、船を運航させるのはスルタンの権利だったと記録している。「商船長（*nakhoda*）」という語は貴族の称号として使われ、商人という独立した職業は存在しなかった」（Milner pp.72-73）

海の方角は、王宮とモスクや市場が建ち並ぶ交易港を意味し、そこに行くことは海洋交易とそれらに従事する生活様式と交わることを意味していた。ダヤクとはこうした王権の中核・交易拠点から見た河川上流の山奥の生活様式と住民を指していた。山の中の「田舎」に近い概念かも知れない。

サラワクではダヤクに対する海岸部の生活と慣習、その住民をマレーと呼ぶことが多い⁹。そして、ダヤクとマレーは明確に対立する対概念としてとらえられている。ダヤクとは内陸山地のロングハウスに住み、焼畑移動耕作で陸稲を耕作し、祖霊や多様な精霊を信仰する非イスラム教徒であって、かつて首狩を行い、現在でも首狩慣行にともなうさまざまな儀礼体系を文化的特徴としている人々である。これに対して海岸部の町や集村に住むマレーは水稻耕作を行うイスラム教徒で、首狩のような野蛮な慣習はなく、洗練されたマレー文化と王権を中核にした階層社会を形成する。山地民が海岸部へ移住したり、海岸住民と結婚するなどの事情からイスラム教に入信したばあいは「マレーになる（*masok Melayu*）」と言われる。ダヤクとマレーの中間形態の生活は考えられない。「イスラム教徒のイバンというものは存在せず、もしイバンがイスラムに入信すれば、自動的にマレーになる（*masok Melayu*）」（Pringle 1970: p 17）からである。もしイバンがイスラムに入信すると、山地のロングハウス生活では儀礼的に重要で、主要な動物性タンパク源でもある豚を食べることが出来ないため儀礼へ参加出来ない。厳格な一夫一妻制のイバンでは複数の妻を持つことが出来ない、などである。

しかしながら、今日ではダヤクと明確に対立するマレーも決して古くからダヤクの対概念として使われていたわけではない。現在では自身の民族帰属をマレーやイバンとして同定する人々も、ジェームズ・ブルックの到来以前は、自身の出身を居住村落やロングハウスがある河川名

や地名で示すのが普通だった。そして、はっきりとした記録が残されている訳ではないが、マレーという言葉はジェームス・ブルックがシンガポールからサラワクに持ち込んだもので、それ以前はマレーという言葉自体が使われていなかった可能性が大きいという (ibid: xxiv, 59)。ブルックがマレーという名称をサラワクに伝える以前は、海岸平地民はマレーという代わりに「海 (*laut*)」で表されていた。随所で記録されているように、ブルック以前には、そしてブルック政府の行政中心から遠い地域ではブルック到来以降も長くマレーという名称は使われず、「海」が使われていた。ブルネイ周辺では王権の影響下に入ったイスラム教徒のダヤク出身者はビサヤカカダヤン、あるいはオラン・スンガイ (河の人々) とされ、北ボルネオではスルー、ビサヤ、バジャウなどの名称が使われた。カリマンタンでも同様だったと考えられ、例えば東カリマンタンのクタイ王国周辺では通婚や商取引を通じてイスラム化したダヤク出身者は「クタイになる」と言われた。「海」はこうした同化現象を包括的に指す言葉だっただろう。

山地民生活と海岸平地民生活との重要な分かれ目はイスラム教徒か否かだった。また、イスラムがボルネオに伝わる以前は、イスラムと同様王権と階層制を特徴とするヒンドゥー的世界観が海岸社会の政治的イデオロギーであって、いずれにせよ、それは分散したロングハウスを社会単位とし、焼畑耕作、首狩慣行や平等社会を特徴とする山地民社会とは相容れない政治イデオロギーだった。

このように、山地民社会と海岸社会では世界観や政治イデオロギーという点で漠然とした対比があり、その結果としてそれぞれの生活様式には明確な対比があったが、それは今日のボルネオ社会にあるような民族意識や帰属意識としてのダヤクやマレーとは大きな隔たりがあり、民族意識というよりむしろ世界観や価値観にかかわるイデオロギー的な対比だった。

マレー人やマレー文化といった用法にあるように、今日ではマレーは民族文化や民族帰属を表す用語として使われるのが普通である。しかし、そもそもマレーという用語もまた、語源は地名から来ているようである。7世紀から11世紀頃の東スマトラのシュリビジャヤ王国の王都に比定されているパレンバン近くにはムラユ川があり、また同じく東スマトラで、30以上のチャンディと多量の仏像や陶磁器片が発掘されたジャンビにもムラユ川があるという (Milner: pp.18-19)。帰属や出身を居住地周辺の河川名で表す慣習を考えると、マレー (ムラユ) もかつては河川名であり、河川流域集団名だった可能性が高い。アンダヤは現在の民族意識に近い帰属集団名としてのマレー (ムラユ) はマラッカ海峡周辺で7世紀頃から使われ出したのが起源ではないかと推定する (Andaya 2001)。こうしたことから、元来は河川名にもとづく出身帰属の表現だったマレーは、マラッカ王国からその後裔に当たるジョホール王国へと引き継がれ、次第に帰属意識と民族意識を形成しながら、やがてボルネオへも伝えられて来たと考えるのが妥当な解釈だろう。

ブルックがサラワクにマレーという名称を伝えた時には、イギリス人植民者達は当時の西欧観念にもとづきマレーを「民族名」として理解し、そのような用法の中で伝えただろう。そうした中で、ダヤクもまた西欧的民族概念としてとらえられ、あたかも民族集団名であるかのように扱われ記述されてきた。ブルック政府の行政はそうした西欧的観念にもとづき行われ、行政文書の中でもそのように記述される。ブルックの支配が拡大し、植民地行政が浸透するに従い西欧的民族概念としてのマレーがダヤクと対となり、広くサラワク全土に浸透する。植民地行政はマレーあるいは「ムラユの人々」を「マレー民族」とし、ダヤクあるいは「内陸奥地の人々」を「ダヤク族」として認識し扱った。「ダヤク族」ではあまりに包括的に過ぎ、個別民

族集団として扱うに不十分な場合は海ダヤク族、陸ダヤク族という下位区分を設け、さらにダヤク族からもれた山地民諸集団は、カヤン族、クニャ族、クラビット族などの名称が当てられた。今日では、これら人々はすべて自らも民族帰属をそうした名称で表現するが、かつてならずべてダヤクだった人々である。

古くからの東南アジア島嶼部民俗のダヤク概念は、このようにして西欧的民族概念としてのマレーと接合されたのである。しかし、ダヤクやマレーが今日のようにダヤク族やマレー人のような民族集団名としてボルネオの人々に定着するには長い年月が必要だった。ブルックの支配が始まった頃のサラワクでは、ダヤクの生活と「海」の生活は連続的で、完全に分断されたものではなかったことが記録されている。

サラワクでは河川中流域から下流域にかけての地域で生活する人々は、イバンとマレーのどちらかに帰属するという明確な意識なしに混在して住んでいた。ブルック政府の行政は、少なくとも結果的にはイバン族とマレー人に明確な境界を設けることとなった。

ボルネオ島の南部を領有したオランダ植民地政府の支配が内陸奥地に及ぶのはブルック政府よりもかなり遅かった。熱帯雨林が深く、容易に内陸に到達出来なかったこと、首狩慣行が広く行われ「危険」だったこと、また当時はボルネオ奥地への経済的な関心が低かったことなどが理由である。サラワクのイギリス人支配が拡大するにつれ、これに対抗するため、植民地領土確保の必要から行政官が置かれたのはやっと1898年になってからだった。こうした歴史的経緯から、カリマンタンでは民族集団としてのダヤク族はいくつかの下位区分（例えばガジュ・ダヤク族など）があるだけで、いくつもの民族集団として識別されるようになるのはごく近年になってからである。

カリマンタン在住の行政官は内陸奥地へ行政権が及ばないことを認め、在地権力として大小の王権の存在を容認していた。クタイヤポンティアナックの王も王宮も太平洋戦争時に日本軍の占領で廃止されるまで存続していた。また、オランダの影響が及ぶ前には河川沿いに奥地まで大小の王権が存在し、山地ダヤクの人々はこうした王権との関わりの中で生活していた。

西カリマンタンの大河カプアス川の上流域北部は、現在サラワクのイバンが住む地域に隣接し、住民は文化的・言語的にイバンに近い人々である。オランダ植民地行政官はこの地域の人々にはイスラム教徒でありながらロングハウスに住み、ダヤクともイスラムとも分類しきれない人々がかなりいることを報告している（Pringle: 17）。サラワクではイスラム教徒のイバンは存在しない。イスラム化したダヤク出身者はマレーである。このように、集団帰属や帰属意識が流動的で曖昧なのはダヤクとマレーの間だけではない。ダヤクと呼ばれる多様な集団も元来は流動的なものであったと考えるべきである。

東カリマンタンから中部カリマンタンにかけてのサラワク国境に近い山岳地帯に住むアオヘン（Aoheng）は山地民ダヤクの集団形成の事例として興味深い。アオヘンは共通の言語・文化を共有し、共通の帰属意識を持っている。アオヘンという名称は彼ら自身の自称でもある。その意味でアオヘンは民族集団と呼ぶことが出来る。しかし、その歴史をさかのぼるとアオヘンは共通の祖先をもつ人々の集団ではなく、農耕民や遊動採集狩猟民などさまざまな集団が徐々に集まり、比較的最近になって形成されたものだと分かる。言語・文化を異にする多様な人々が、民族意識を共有するひとつの集団を形成する過程で重要な機能を果たしたものは、ペンゴサン（*pengosang*）という豊饒儀礼であるという。この儀礼は定期的に行うものではなく、不作や疫病の流行など危機的状況が生じた時に執行される。儀礼の執行はアオヘン社会の統合のた

めの政治的道具として機能し、これによってアオヘン社会は結束し、今日のようなまとまりを持ったのだという（Sellato 2002: 163-191）。アオヘンも植民地行政とその後のインドネシア政府の影響が及ぶ前、民族集団という概念が広がる以前なら、民族集団とは呼ばれなかっただろう。現代カリマンタンでこの人々がどのように呼ばれているかは定かではないが、ダヤク・アオヘンだろうか。

同様に、ブルック政府の植民地行政の影響が及ぶのが遅かったサラワク中北部でも事情はよく似ていること、そして、今日のような民族集団分類と民族意識は植民地時代に形成されたものであることが指摘されている（Rousseau 1990）。

植民地行政は本来連続的に遷移するダヤクと「海」という、二つの異なる生態環境とそこに適応する生活様式を、二つの対立する民族集団ダヤク族とマレー人に分断した。それは、植民地行政にとって住民を秩序立てて分類し、分割支配するという行政上の利便性とも合致していた。しかし、こうした民族集団分類と民族への分断は植民地支配の行政上の目的からだけ生まれたものではない。研究者もまたこの地域の人々を二つのカテゴリーに分類し、それぞれ異なる起源を持つ二つの人々であると認識してきた。二つのカテゴリーとはプロト・マレー人（Proto-Malay）と新マレー人（Deutero-Malay）である。用語が示すように、プロト・マレーとはこの地域の先住民と思われた人々で、ボルネオではダヤクを示している。これに対して、新マレーとはその後大陸部から金属器や水稻耕作農耕などの文化とともにこの地域に移住してきた人々の子孫であるとされる。しかし、すでに見たように、すくなくともサラワクではマレーとは海岸部に住みイスラム化したダヤクの子孫たちで、異なる文化（マレー文化）をもつ人々が（マレー半島、スマトラ方面から）移住してきたことを示す根拠は何もない。奇妙なことに誤った認識にもとづく二分法は今日の民族誌の先端的諸研究でも使われ続けている。

3. ボルネオの生態環境と“民族”分布

ボルネオを含めた島嶼部東南アジア社会は、プロト・マレーと新マレー（Proto-Malay/Deutero-Malay）という大陸方面からの二波の移民によって歴史的に形成されたと考えられてきた民族誌学上の理由はいくつか推定出来る。一つには焼畑耕作が原始的農法であり、水稻耕作技術が新しく進んだ農法であるとする、水稻耕作の優越性と稲作農耕技術に対する思い込みである。また、内陸山地でロングハウスに居住し、焼畑移動耕作を行いつつ首狩慣行に従う獰猛果敢な民族というイメージは、首狩族（Headhunter）という印象的な表現と共に、実態とは別に野蛮で原始的の印象を与え続けてきた。原始的野蛮で獰猛な山地民というイメージは研究者を含めた多くの西欧人に共有されたもので、邦語文献もそのイメージをそのまま受け売りし続けてきた。さらに、このイメージは東南アジアの広い地域で海岸平野部に王国を形成する平地住民が、内陸山地住民を遅れた野蛮な人々と認識してきた在地民俗中のイメージとも共鳴した。焼畑移動耕作は古い遅れた農法であって、ダヤクは古くからこの地に住む原始的で獰猛な野蛮人だったのである。

多くの研究が示すように、内陸山地の熱帯雨林地帯では焼畑耕作はきわめて適格的な農耕様式であり（Fox (ed) 1992）、古くから行われてきた農耕技術かも知れないが、そのことは水稻耕作が新たな移民の波がもたらした新しく進んだ農耕技術であることを示す訳ではない。

ボルネオ島は世界で3番目の総面積をもつ巨大な島である。島の北東部マレーシア・サバ州

のキナバル山（標高 4,095 m）を最高峰に南西方向へなだらかに海に向かって下降した地形をもつ。サバ州では山地が海に迫る所もあるが、山地と海の間には熱帯雨林に覆われ河川が蛇行する広い平野部が広がっている。サラワクは海岸から比較的山が近いが、カリマンタン諸州は東カリマンタンの山地を除き、熱帯雨林と湿地帯が広がり、なだらかな丘陵が北に向かい緩慢に高くなってゆく。したがって、地形的には山地焼畑農耕地域と水稲耕作地域を明確に区分するような自然環境はない [地図 1]。



[地図 1]

内陸山地部は険しい山に覆われた地域はむしろ少なく、河川上流域もなだらかな丘陵地帯が広がり、その間を蛇行しつつ流れる河川は随所に三日月湖状の湿地を残している。そうした湿地周辺では、サゴが半栽培の状態で生育し、サゴ澱粉が採集されると共に、天水田となって水稲耕作が行われている [写真 1]。

河川は蛇行しつつ無数の支流を集め、やがて海に注ぐが、ボルネオでは河川は植民地時代以前も、また今日でも内陸部と海岸部を結ぶもっとも重要な交通路である。インドネシアの開発政策、特に森林開発の進展によって内陸奥地まで木材切り出し用の道路が開かれているが、道路は雨季の洪水により容易に分断され、長期にわたり使用出来ない状態が続くことは珍しくない。河川は内陸山地産物と海岸部からの物資の交易路で、今日では内陸部への補給路としての役割が重要となっている。

河川の合流点は交易拠点で、大小さまざまな王権の拠点として王都が置かれた所でもあった。マングローブに覆われた海岸部周辺の湿地帯を避け、海岸よりやや内陸に入った最初の大きな河川との合流点がかもっとも大きな交易市場で、多くの東南アジア王都が立地する場所だった。ボルネオではブルネイのバンダルスリブガワン、西カリマンタンのポンティアナック、東カリマンタンのクタイなど現在でも王宮と大モスクが残る。



[写真 1] 内陸山地湿地の天水田、開発による大規模な灌漑田も見られる

このようにボルネオでは内陸奥地の山地から海岸部まで、漸次的に生態環境と風景が変化し、それにともない人々の生活様式も漸次的に変化する。水稲耕作は平地部の「新マレー人」に限られた農耕様式ではない。今日では灌漑設備をともなう水稲耕作は、揚子江中流域から下流域にかけてかなり古くから行われていることが考古学的に知られており、それはオーストロネシア人の東南アジアへの南下拡散が始まる遙か以前のことである。また、ボルネオ山地民の農耕様式についても、ダヤクが必ずしも焼畑耕作民でないことは、実はかなり古くから記録されてきている。

焼畑移動耕作がイバンにとってアイデンティティを示す重要な生業形態であることを示しつつも、プリングルは次のように述べる。

「フリーマンが言うこととは逆に、イバンの農耕は伝統的には陸稲栽培に限られていた訳ではない。サラワク第二地区の下流域に住むイバンは、彼らの言う所の湿地米 (*padi paya*) を常に栽培していた。この種の農耕は、山地焼畑耕作と湿地水田耕作という二つの耕作様式をめぐって構築され、東南アジア諸社会の二つの対極的なタイプを特徴付けると広く信じられて来た古典的学問的モデルのちょうど中間のあると言える。(Pringle 1970: 27-28)」

こうした水稲耕作は普通河川の自然堤防近くで行い、苗床から田植え（移植農法）を行うが、灌漑や犁耕は行わず、稲の品種も陸稲とは異なり、また水田も数年で放棄して移動するのだという。サラワクのムラナウは一般にサゴ栽培民として知られているが、河川際の自然堤防近くの湿地で稲を栽培することもあった。この場合はプリングルが報告するイバンの水稲耕作とよく似た栽培技術による。灌漑せずに天水田が基本だが、苗床を作り田植えを行う¹⁰。反対に、陸稲畑も播種だけに限られる訳ではなく、苗床を作り山地斜面の畑に移植を行う農法も知られている。このような、焼畑陸稲耕作と水稲耕作の中間的な形態の稲作は、サラワク各地から報告があり、少なくともサラワクでは、そしておそらくボルネオ全島やスラウェシ島をはじめ東南アジア全域で決して珍しいものではなかったと思われる¹¹。

ボルネオ島の東に隣接するスラウェシ島は、ボルネオ同様に内陸山地民と海岸平地民の二つの生活様式が知られている。山地民はトラジャと称され「山の住民」を意味する。トラジャはやはりボルネオ同様に、現在では民族集団「トラジャ族」となり、独特の建築トンコナンや盛大な葬送儀礼で観光化している。ここでもかつては山地民による焼畑移動陸稲栽培と平地民ブギスやマカッサルによる灌漑水田での水稲耕作が対比されてきたが、二つの耕作様式は対立するのではなく、特に湿地や森林を開発水田化して行く過程で、中間的なさまざまな稲作様式が取られていることが報告されている¹²。

内陸山地に住むダヤクが灌漑技術や水稲耕作技術を知らない訳ではないことは、北部サラワク内陸山地で見事な灌漑水田を耕作することでよく知られているクラビットの事例でも分かる。そして、反対にマレーが、あるいは海岸平地に住む人々が必ずしも水稲耕作に長けている訳でない。19世紀後半以降、アジア各地の平野部で水田開発が進められ、灌漑水田で栽培する水稲が稲作の主たる生産方法になったが、ボルネオでは稲作は主に山地民によって行われていたと考えられている。

「主に河川下流域で生活するマレーにとって、泥炭で深く覆われた河川下流域の環境で米を栽培することは容易なことではなかった。このため、米は交易品として内陸部に依存していた。……米はムスリムと山地民の政治的関係に絡んでいた。サリバスのマレーはイバンの家族毎に一定量の米を徴税しようとした。どれほどうまくいったかは分からないが、後にブルックは米

がこの地域の伝統的な税だと考え、イバンから米で徴税しようとした。」(ibid: 63)

そして、山地民社会は山地民自身と海岸部マレーの消費量をまかなうのに十分な米を生産する生産力があったのだという。

こうした事例から明らかなのは、陸稲耕作と水稲耕作は農耕技術としても、栽培される生態環境にしても、はっきりとした対立がある訳ではなく、技術的にも生態環境という点でも両者は連続的に遷移する両極にあるということである。したがって、灌漑水稲耕作技術は、少なくともボルネオでは焼畑移動耕作よりも新しく進んだ農法であるとは言えず、また灌漑水稲耕作技術を伝えた新来の「新マレー人」の移住など無かったということである。それでは、両極にあるこの二つの農耕技術はボルネオ住民にとってどのような意味があるのだろうか。

西カリマンタンのグライ・ダヤク (Gelai Dayak) を調査したヘリウェルは、グライの人々が焼畑移動耕作に固執する理由は民族性の問題だという (Helliwell 1992)。グライの人々は山間部の小さな湿地で水稲耕作を行い、灌漑水稲耕作技術は熟知しており、反当収量が多く除草の手間が省けるなど水稲耕作の利点もよく知っている。水稲耕作を行わない理由を聞くと、畔造りや灌漑に必要な重労働を理由にあげるのではなく、泥まみれで水田で一日中働くマレーを馬鹿にしながら、彼らにとってそのような作業は考えられないのだと冗談半分に説明する。ダヤクの人々の生活にとって、土地に縛り付けられる恒久水田での水稲耕作よりも移動性の高い焼畑耕作が、自由で相性の良い生業形態なのだという。グライの人々もかつては 100 Km ほど西方海岸にあったムスリム小王国の干渉を受けた伝承が残っている。ダヤクは周辺他集団との抗争や海岸平地王権からの干渉を防ぐ意味でも移動性が高い焼畑移動耕作がふさわしいと考えている。また、グライが奴隷 (*ulun*) について語るのは、常に水稲耕作と関わる話題の中であるという。グライにとっては水田とは奴隷が働かされる場であり、また水田に縛り付けられるのも奴隷だからである。

焼畑移動耕作に固執する理由が、実用的な動機よりもむしろ価値意識、イデオロギーによるのはサラワクのイバンも同様である。イバンもグライと同じく水稲耕作の利点は熟知している。首狩が遠い過去の慣行となった今日のサラワクでは、イバンにとって焼畑移動耕作は民族的アイデンティティを示す重要な生業形態であるとイバン自身が認識している¹⁸。

つまり、焼畑陸稲栽培と水稲栽培という両極にある二つの稲作は、農耕技術の上でも栽培される生態環境の上でも連続しており、両者を明確に分けねばならない理由は何もないにもかかわらず、ボルネオ住民にとっては概念上で両極に対立するのは価値意識の問題ということである。この対立はボルネオに限らず、広く島嶼部東南アジアから報告されている。スラウェシ南部のブギス研究の中で、稲作の問題を挙げたペルラスは、ブギスでもさまざまな様式の稲作が行われ、その技術が連続的であることを指摘しながら、山地の陸稲と平地の水稲という観念上の対立極は、オーストロネシア文化が元来もつ、天と地、山と海、日の出と日の入り、右と左、太陽と月、男と女、生と死などの対立といった双分的世界観によるのではないかと指摘する (Pelras 1996: 38-48, 99-103)。

こうした世界観と価値意識は、植民地化の過程で持ち込まれた西欧的民族観や民族意識と接合され、植民地支配の過程で徐々に現実のものとして重要な社会的意味を帯びてきたと考えられる。

4. 都市化と民族意識

ダヤクは元来は山の方位を示す概念で、おそらくはオーストロネシア文化が東南アジア島嶼世界に拡散する中で、海岸から離れた内陸山地部の生活とその住民を示すよう徐々に語義が変化してきたものだろう。ダヤクという語には、かつての首狩慣行を別にしても、ロングハウス生活、焼畑移動耕作と香り高い高級米としての陸稲、それによって醸される酒 (*tuak*)、酒が供される諸儀礼と豚の供犠、豚肉料理、山での狩猟などなど、イスラム化したマレー生活にはない、山の生活を連想されるさまざまな含意がある。ダヤクが次第にイバン、ビダユなどの“民族名称”に置き換わった現代サラワクでも、ダヤクの名称を好むダヤク人が多いのは、ダヤクという言葉の背景にある、そして現代サラワクの生活では過去のものとなりつつあるダヤク生活にノスタルジーを感じるからではないだろうか。

このことは、ダヤク意識が現実のダヤク生活から離れ、抽象的な民族意識へと変貌していることを示している。事実、イバン、ビダユ、オラン・ウル、ムラナウなどの民族集団活動は故郷を遠く離れた都市部で活発であり、その中心となっている人々の多くは都市部で高等教育を受けた人々である。彼らは10代で故郷を離れたため、出身地での生活経験は幼少時に限られ、儀礼的知識や伝統的慣習などはほとんど知らないのが現実である¹⁴。サラワクでは、特に1980年代後半から急速に都市化が進行し、山地社会の過疎化が進んでいる。山地ばかりか平野部でも農業をになうのは老人たちばかりである。ダヤク文化をになう人々はすでに高齢化し、遠くない将来ダヤク社会は大きく変貌すると予想出来る。ダヤク文化は文化村と観光ダヤクにわずかに名残を残すだけになるだろう。

また、北サラワクからブルネイにかけての内陸平野に多く分布するカダヤンの人々は、かつてはブルネイ王朝に仕える稲作に精通した農耕民だった。彼らの誇りは水稲・陸稲を含めた高度な稲作技術で、稲作こそがカダヤンのアイデンティティそのものだったとカダヤン自身が認めている。しかしながら、近年の都市化と果樹などの商品作物栽培の拡大で、現在ではほとんど稲作を行わなくなっている。彼らが日常消費する米はタイからの輸入米である。一方でこうした事実がありながら、集団としてのアイデンティティは崩壊するどころか、周辺他民族の活動に刺激され、民族集団活動はきわめて活発になりつつある¹⁵。これらの民族主義的活動に見られるものは、抽象化された民族意識である。

同様のことは西カリマンタンでも言える。サラワクと異なり、カリマンタンではダヤクの対概念はマレーではない。ダヤクの先住民意識にとっての対立項はスハルト時代のトランスミグレーション移民とその子孫たちである [写真2]。

西カリマンタンの州都ポンティアナックは、外来のアラブ商人が王都を築き、ポンティアナック王となったと伝えられる都市である。ランダク川とカプアス川の合流点には、現在でも王宮と大モスク、市場が並び、周辺にはブギス村、アラブ村などの地名が残り、古くからの東南アジア王都・交易都市の面影を伝えている。サラワクと異なり、カリマンタンではオランダ植民地行政の波及が遅く、大きな変化を受ける前に太平洋戦争の日本占領時代を迎えたため、スカルノ時代からスハルト時代にかけての対共産ゲリラ戦闘や開発とトランスミグレーション政策の影響を被るまで比較的平穏だったためである。そのため、特にスハルト時代以降のジャワなど外部からの支配と影響は、人々に大きな衝撃を残した。

マレー概念は隣国のマレーシアから伝わり、カリマンタンにもマレー人と呼ばれる人々はい



〔写真 2〕 ダヤク民族団体でのダヤク舞踏の練習

るが、しかし実際に自らマレーを名乗るものはほとんど見られない。マレーの名称は外部から与えられたもので、実態はブギス人やバンジャール人、アラブ人などを名乗る住民を指している。そもそもマレー人やアラブ人といったアイデンティティ自体がきわめて曖昧で、時と状況により自らのアイデンティティを変えるのはごく普通のことである¹⁶。

ダヤクが強い対立意識を持つのは、このような多様な平地民に対してではなく、スハルト時代以降優勢な集団としてボルネオ社会に移入されたトランスミグレーション移民である。スハルト政権崩壊後、こうした対立意識と先住民意識はダイヤキズムとして高揚を見せて、さまざまな民族運動や地方政治の中での政治活動に結びついている¹⁷。西カリマンタンでは現在 151 ものダヤク下位集団がダヤク文化研究所で認知されている。しかし、こうした“民族集団”が、少なくともかつては固定的なものではなかったことは上に引用したアオヘンの事例でも明らかだろう。おそらく、これらの人々もかつては自身の帰属や出身を地名、河川名で表したことだろう。現在の帰属意識を聞くと例外なくおしなべて「ダヤクである」と答える。しかし、広大な西カリマンタンで 151 もの集団からなり、168 もの言語を話すダヤクにどれだけの文化的共通性があるものかきわめて疑わしいと言わざるを得ない。あるいは将来、サラワクのイバンのような優勢なダヤク集団が形成されるだろうか。

サラワクに遅れるとはいえ、近年急速に開発が進むカリマンタンではサラワク同様に山地社会の過疎化、特に若年者の都市流入が急速に進んでいる。こうした人々は故郷に帰ることなく、都市部で結婚し子供を持つ。タンジュンプラ大学の副学長はダヤク出身で自身ダヤクとしてのアイデンティティをもつという。妻は同じくダヤク出身であるが、出身地が異なるため互いに母語は全く通じない。そのため夫婦の会話はインドネシア語（マレー語）だという。子供はインドネシア語のみを話し、父の母語も母の母語も片言しか理解出来ない。しかし、子供もアイデンティティはダヤクであるという。

【引用文献一覧】

Andaya, Leonard Y.

2001 “The Search for the ‘Origin’ of Melayu,” *Journal of Southeast Asian Studies* Vol. 32-3: 315-330

Colfer, Carol J. Pierce

1997 *Beyond Slash and Burn: Building on Indigenous Management on Borneo’s Tropical Rain Forests*, New York

- Botanical Garden
Freeman, Derek
1960 “The Iban of Western Borneo,” G. P. Murdock (ed) *Social Structure in Southeast Asia*, Quadrangle Books, Chicago.
- Haddon, Alfred Cort
1901 *Head-Hunters: Black, White, and Brown*, Methuen, London.
- Helliwell, Christine
1992 “Evolution and Ethnicity: A Note on Rice Cultivation Practices in Borneo,” in J. J. Fox (ed) *The Heritage of Traditional Agriculture among the Western Austronesians*, Research School of Pacific Studies, ANU, Canberra.
- 石井眞夫
2002 「カリマンタン首狩事件と現代国家：民族対立抗争の政治人類学」、『人文論叢』第18号、三重大学人文学部
2003 “Reconstruction or Dissolution: The Shifting Ethnicity of the Kadayan of Northern Sarawak,” in Toh Goda (ed) *Postcolonialism and Local Politics in Southeast Asia*, Manila: New Day Publishers
2005 “Restoration of Small Ethnic Groups under Urbanization in Northern Sarawak”, in Toh Goda & Hoang Van Viet (ed) *Urbanization and the Formation of Ethnicity in Southeast Asia*, International Science Conference held in Ho Chi Minh City, University of Social Sciences and Humanities Ho Chi Minh City, Vietnam
2009 「東マレーシア、サラワク州の“中規模”民族集団 — サラワク州地方政治の中で」、『インターカレッジ・カルチュラル（日本国際文化学会年報）』7
- King, Victor
1993 *The Peoples of Borneo*, Oxford & Cambridge, Blackwell Publishing.
- 倉田 勇
1972 「〈民俗方位〉の一考察」、『天理大学学報』第82輯
- Mattulada & Narifumi Maeda
1982 (ed) *Villages and the Agricultural Landscape in South Sulawesi*, Kyoto: Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University
- Milner, Anthony
2011 *The Malays*, Oxford & Cambridge, Blackwell Publishing.
- Nagata, Judith A.
1974 “What is a Malay?: Situational Selection of Ethnic Identity in a Plural Society,” *American Ethnologist* 1-2
- Pelras, Christian
1996 *The Bugis (The Peoples of South-East Asia and the Pacific)*, Blackwell Publishers
- Pringle, Robert
1970 *Rajah and Rebels: The Ibans of Sarawak under Brooke Rule, 1841-1941*, London, Macmillan & Co. Ltd.
- Rousseau, Jerome
1990 *Central Borneo: Ethnic Identity and Social Life in a Stratified Society*, Oxford, Clarendon Press.
- Sellato, Bernard
2002 *Innermost Borneo: Studies in Dayak Cultures*, Singapore: Singapore, University Press
- 移川子之蔵
1940 「方位名称と民族移動並に地形」、安藤教授還暦祝賀記念会編『安藤教授還暦祝賀記念論文集』東京、三省堂、所収
- 内堀基光
1999 「イバンは海ダヤクか」、『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』第96号

2000 「イバンは海ダヤクか：民族を同定することの論理的根拠からはじめて」、『アジア・アフリカ言語文化研究所通信』第99号

【注】

- 1 イバン (Iban) という名称を民族集団名として使い出したのはハッドンと考えられている (Haddon 1901: 324-325)。
- 2 内堀 1999、2000 参照
- 3 2010年12月のサラワク統計月報による。データは2000年のもの。
- 4 こうした民族集団の形成過程はサラワク社会の研究で重要な意味を持つが、ここでは概要の議論にとどめる (cf. 石井: 2009)。
- 5 倉田: 1972 など、古くは移川: 1940 など。また、スラウエシのトラジャヤバリ島の Kaja と Kelod など同様の海と山の方位対立は広く見られる。
- 6 カリマンタンの総人口はおおよそ 1,377 万ほどで、確かな数字があるわけではないがトランスミグラーシ移民とその子孫は人口は約 260 万になるという。
- 7 Dayak, Dyak, Daya などと表記され、邦文でもダヤク、ないしはダイヤクなどの表記が見られる。本稿では、民族集団名称としてはダヤク、ダヤク民族主義を「ダイヤキズム」と表記する。
- 8 本稿は科学研究費補助金 (基盤研究 (C)) 「マレー人との共棲関係から見たボルネオ・オダヤクの山地民意識の社会人類学的研究 (研究代表者石井眞夫、課題番号 22510820)」によるサラワクおよび西カリマンタン州で行われた現地調査資料にもとづいている。現地調査に当たってはサラワク博物館、サラワク・マレーシア大学東アジア研究所、西カリマンタンのダヤク文化研究所、タンジュンブラ大学の協力を得た。協力いただいた関係者に謝意を表したい。
- 9 マレー (Malay) は英語表記にもとづくもので原語は Melayu だが、本稿は邦語の慣習的表記にしたがってマレーと記述する。
- 10 河川近くの湿地で灌漑の必要がないものと思われるが、ボルネオ内陸部にはこのような地形が多い。乾季には乾くが雨季には泥湿地となる古い流路跡に残る窪地は、灌漑の必要がなく水稻耕作に適した場所である。こういう場所では水田脇の丘陵斜面で陸稲が栽培されている。
- 11 ボルネオ島の東に隣接する。
- 12 Maturada & Maeda (ed) 1982 に詳しい。
- 13 長くなるので詳述はしないが、東カリマンタン州で稲作技術も稲作の利点も熟知しながら、またインドネシア政府による内陸水田開発政策にもかかわらず、サゴ栽培・採取に固執する人々の事例も報告されている。ここでも、サゴ栽培・採取に固執する理由はアイデンティティと価値意識の問題であるとしている (Colfer 1992)。
- 14 この点についてはすでに詳しく論じた (Ishii 2005)。
- 15 主としてイバンとピダユの民族協会活動に刺激されたものだが、北部サラワクでは特にオラン・ウルの活動が活発化していることも大きい。カダヤンの民族意識と活動についてはすでに報告した (Ishii 2003)。
- 16 Nagata 1974、Milner 2011: 199-202 に詳しい。ポンティアナックで雇用した車の運転手は初めはマレーと自称しながら、詳しく聞くとプギスであると言いつつ出た。さまざまな出身者が混血しながら社会を作り上げるのが平地民社会である。
- 17 2001年2月から5月にかけて起きたダヤクによるマドゥラ人首狩事件はトランスミグラーシ政策への反発から起きた民族暴動であると言えるが、その背景や実情はきわめてダヤク文化的な背景を持つものだった (石井 2002)。